

ままならぬ Ham Life JA1WOB 齊藤

1965年に電話級を取得して、1966年にJA1WOBを開局して早や47年になります。

私のHam Lifeは何時も満足出来るものでは有りませんでした。

開局を前に送信機や受信機を準備する際に、当時のベストセラー送信機であるトリオのTX-88Aを入手出来ていれば、SWL時代に入手していたトリオの受信機キットJR-200とのコンビネーションで、3.5MC~28MCのALLバンドで、QRV出来てカッコ良いアマ無線局の開局が出来ました。

しかし、TX-88Aを購入する資金も無く、ALLバンド送信機を自作をする、技術も資金も無いので、既に開局している同級生がQRVしている、50MCのモノバンド送信機を作る事になりました。

CQ誌や雑誌などで、50MCは入門バンドとして紹介される事が多くありますが、それはTR-1000やFDAM2などのトランジスタ-TRXが出てきてからであり、QRMが少なくローカルQSOとEスポによるDXQSOが楽しめるバンドとして、運用面からの入門バンドと云えると思います。

1965年当時は国内QSOを楽しむには3.5MCや7MCのAMにQRVするのが、入門バンドと入門モードだった様な気がします。

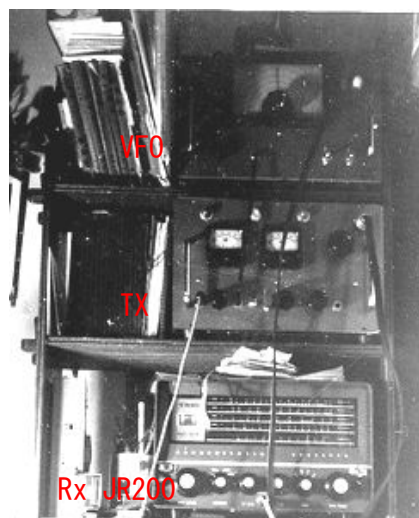
そして、海外局とQSOしたい人は21MCや28MCにQRVしていました。

50MCや144MCのVHF帯は、技術的に難しく真空管やバリコンなどの部品もHF帯で使用するな部品より高周波特性に優れた部品で、割高だった様に思います。バリコンや水晶ソケット、真空管ソケットなどは、ステアタイト製のものを使用しましたし送信管も807ではなくて、2E26や6146が推奨でした。

製作にあたっては、VHFハンドブックを毎日眺めては、どのタイプの送信機にするか、思いを巡らしていました。

そして、ファイナルが2E26の3ステージ(8.4M X3 X2)の送信部と変調器は6V6PPの回路図を手持ちの6L6GBPPに変更して、リードのAS-2のケースに製作する事になりました。

構成が固まり、秋葉原へリードの AS-2 と変調トランスとメーターやタイトバリコンの大物類を仕入れに行きました、ソケットやスイッチ類はジャンク屋で集めた部品を使用する事にしました。発振と逡倍や変調部の真空管は手持ちの真空管でまかないましたが、終段の 2 E 2 6 は高価で入手出来ずに、過号の 240 誌にも掲載しましたが、友人 (JA1SIV) のお兄さん (JA1AUC) からの借用品となりました。



V F O は、資金面で手が回らず、水晶 1 個で Q R V しました。当時のログ帳を見ると、50.7MC で送信して、50.3MC や 50.5MC で受信している LOG の記録があるので、のんびりした Q S O でした。

また、無線仲間から借用した 50.3MC 水晶で送信した LOG もありました。水晶だけでは C Q を出して、呼ばれるのを待つ運用なので、E スポが出て、6 エリアや 8 エリアの局が聞えていても、離れた周波数で呼べど、叫べど、応答する局はありませんでした。

水晶だけの Q R V から 2 ~ 3 ヶ月後、思う様に Q S O が出来ないのので、V F O を製作する事になり、リードの AS-2 に L C ボックスを組み込んで 8Mc 帯の V F O を作成しました。

受信している、周波数に V F O の周波数を合わせてキャリブレを取ってコールすると、コールバックがあり、送受信が同じ周波数で Q S O が出来る様になりました。

しかし、酷い T V I が発生しました。T V の画面が全く見えず、「ピー」と云うノイズで音声も消されてしまいました。

水晶では問題無いのですが、V F O にすると T V I が発生しました。しかも、縞がでる程度のかわいい物でなく T V が壊れたと思う位酷い状態でした。

今、思うと、V F O 出力と送信機の発信段の接続に問題があったと思われます、V F O の出力を 75 オームの同軸ケーブルで直接水晶ソケットに接続した為に mismatching と V F O の出力が大きくて、オーバードライブになっていたと思われます。

V F O が有りながら、仕方無くまた水晶による運用となりました。1967 年には、送信機の終段真空管の 2 E 2 6 を返却して、ジャンク屋で入手し

た6146に変更しました。

2E26に比べてパワーが出る様になった分、TVIも多く出る様になり、中和やファラデーシールドやら、VHFハンドブックに掲載された、いろいろな対策をしたが、TVIが皆無になることはなく、深夜にQRVしていました。

今、思うと、ファイナルはリンク結合のまま、出力は75オームの同軸を5エレ八木に接続していました。

当然VSWR計も無いし、ANTと送信機の出力のインピーダンスマッチングを取り、SWR計で測定する概念すら有りませんでした。

また、6146もジャンク屋の怪しげな物で真空管の足が2E26と同じだったので差換えただけの乱暴なやり方では、スプリアスを撒き散らしていたのだと思います。

また、当時のアンテナ製作は周波数から、波長を割り出して $\lambda/2$ のダイポールにしていました、短縮率や共振周波数の調整やインピーダンス調整をする事は計算値だけで、測定や調整は出来ませんでした。

その後、TR-1000を入手してからは、TVIから開放されましたが、相変わらず送信が水晶なので、相手局にゼロインしてコールする事が出来ず、またパワーも1wなのでQSOはままならず、ローカルのクラブ員各局とのQSOが主でした。

周波数が駄目ならと思い、6JS6のGGアンプを作り、1w入力で25w位の出力で、Eスポのパイルアップには勝ちました。

でもやはり、送信と受信が同一周波数で運用するのが一般的になって来たので水晶でのQRVは限界となってきました。

次に、パナ6を入手してやっと、VFOによる送信が可能となりましたが、今度はVFOのQRHが酷く、50MCと144MCのトリオ製のVFO-2を外部接続してやっと安定したVFO運用が可能となりました。次にモバイル運用がアクティブになり、ノイズと伝播に優れた144MCのFMに無線仲間はQSYして行きました。



間もなく私もトリオTR7100を購入して144MCのFMデビューとなりました。

12チャンネルの水晶式のFM機で、メインチャンネルと3チャンネル位の水晶が実装されていました。

電波伝播も良く、アンテナも1m位の5/8λが簡単に車に取り付けられる事もあり、東京のモバイルと静岡のモバイル同士がM5でQSO出来て、50Mとは違う楽しみがあり、固定には7エレ八木にローテータを付けて、モバイル局を追いかけていました。



しかし、市販水晶のサブチャンネルはいつも混信状態で、弱肉強食状態でした。すると、〇〇クラブチャンネルが登場して来ました。

市販水晶の隙間の周波数を特注して、〇〇クラブに入会すると〇〇クラブ水晶を購入する事が出来システムでした。

無線仲間と一緒に〇〇クラブに入会して、〇〇クラブチャンネルを使用して、混信状態からは逃げる事は出来ましたが、〇〇クラブの局のみのQSOになってしまい、何となく違和感を覚える様になりました。

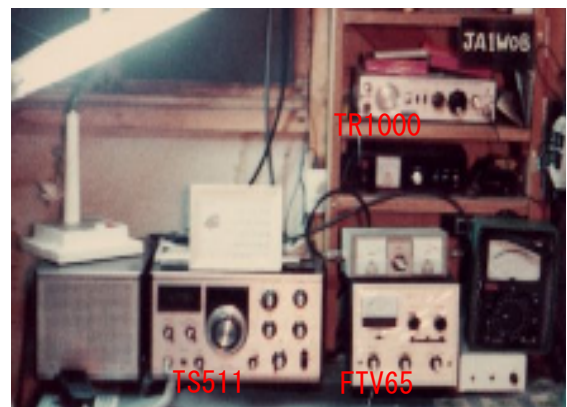
アマ無線の基本は不特定多数の局と交信するのが、醍醐味と考えています。特定の局とのラグチューも楽しいのですが、やはり遠方の局と偶然に交信出来るのが、私は楽しみです。

144MCのローカルラグチーQSOから、HF帯のデビューとなります1970年代になると、HF帯ではAMの電波を聞くことは少なくなり、SSB化して行きました。

50MCでもSSBの局が多く聞かれる様になり、TR-1000ではAMだけの受信なのでモガモガ行って復調は出来ませんでした。

TR-1000の検波回路をプロダクト検波に変更して、大きなダイヤルを付けてSSBの受信だけば何とか出来る様になりました。

やはり、アマ無線は電波を発信しなければ趣味として半減してしまいます当時の新鋭機TS-511とFTV



650をローカルからQSYして貰い、やっとHFと50MCのSSBでQRV出来る様になりました。

7MC はフルサイズのインバーテッドVアンテナでSWRも 1.2 以下調整して日本全国良く飛びました。

50MCのFTV650はファイナルを6146から4CX250に改造したトランスバータで、アンテナは5エレ八木でEスポには威力を發揮しました。

やっと、ジャンクシャックから立派なアマチュア無線局になりました。

しかしそれも1年あまりで終了となります。

1973年10月の結婚と同時に、アパマンハムとなりアンテナはベランダの物干しに取り付けた、50MCのダイポールのみとなり、飛ばない、聞えない、そして仕事と家事が忙しくなり、大きな無線機は邪魔になり、TR1000とミズホ通信の50MC AM/CW 機 MK610を残してQRT状態になりました。

復活にいたる話は次回へ続きます。